|  |
| --- |
| 〔講座解説〕　第1章　商品　第１節　商品の二つの要因――使用価値と価値  |
| 「マルクス主義経済学講座」（上・新日本出版社） |
| 商品の定義 | 交換によって他人の欲望を充足する物的財貨である。その財貨は、消費財貨であるか、生産財貨であるか、問題にされない。 |
| 資本主義的生産過程を分析する | ❶まず、商品の分析からはじめ→❷ついで、貨幣発生のメカニズム（貨幣発生の必然性）を明らかにし→❸さらに、貨幣のいろいろな機能を説明したあと→❹資本という範疇に到達することをめざした。 |
| 分析は弁証法的方法である。 | 商品のもっとも簡単な規定（＝もっとも抽象的な規定）から出発し、そしてより多様な規定（＝より具体的な規定）を与えながら、論理展開する。「抽象的なものから具体的なものへ上向する方法」ことが科学的に正しいと明言している。 |
| 二つの要因の分析 | 商品は、使用価値と価値という二つの要因の統一物である。それぞれを考察していく。 |
| まず、使用価値 | ある物がもっている人間の欲望を満たすことができるという性質。すなわちある物の有用性のことである。有用性はその物を使用価値にする。使用価値は、ある一定量の物として存在する。使用価値は、使用または消費によってだけ実現される。 |
| 交換価値 | ある使用価値が他の使用価値と交換される量的関係のこと。すなわち比率として目の前に現れる。 |
| 次に価値とは | 商品の価値は商品に対象化されている抽象的人間労働の凝固物（結晶）である。この認識は、商品体の使用価値を抽象して得られる。すなわち商品体に残るのは、人間労働力の凝固物という同じ性質だけである。 |
| 価値の実体 | 商品に対象化されている抽象的人間労働である。 |
| 価値量 | 抽象的人間労働の分量。この分量は労働そのものの量であり、労働の時間的継続によって度量される。つまり、価値量とは商品を生産するのに必要な労働時間のことである。 |
| 価値の現象形態 | 価値の現象形態が商品の交換価値である。 |
| 価値量の変動 | 社会的に必要な労働時間に規定される。労働の量に正比例する。労働の生産力が増大すると、使用価値を生産するのに必要な労働時間は少ない。価値量は生産力に反比例して変動する。 |
| 価値法則 | 商品の価値の実体、商品の価値量を決めるのは、商品生産者の意志や意識からは独立した客観的法則である。 |